大職冠—大織冠の誤
虧心—心を損ねる事、此章は人の知らぬ所にて不正を働くとも神はよく知ると也
震旦—支那
德にとなり—德不孤必有」鄰（論語）

大職冠

作者　近松門左衛門

人間の私語、天の聞ゝこと、雷のごとく、暗室の虧心、神の見ること、電のごとしといへり。天を父とし地を母とし、日を兄とし、月を姉とする時んば、四海皆兄弟にして、唐も大和も國民の、一つ心に睦しき、天の道こそ目出たけれ。我日の本の天つ君、孝德天皇の御宇にあたつて、震旦四百余劫、唐の世第二の主、太宗皇帝と申奉るは、聖化殊に盛にして、異國本朝明王の、德にとなりし遣唐使、唐土船の來朝と、往來絶へぬ萬里の海、波しづかなる御代とかや。比しも貞觀十九年、秋も半ばの月の宴、麟德殿に出御有、もろ〳〵の臣下をめされ、本朕中國に君として、天竺韃靼、外國迄もうとからず。就中日本秋津島は、神の苗裔絶へせず、佛法を尊んで慈悲を旨とし、儒道を學で五倫の道を守り、正直柔和の君子國と傳へ聞。かゝる目出たき日本に緣を組、隣國に親まんと

大職冠—尤も高き位なり
花原磬—寶の磬石
泗濱石—寶の硯
七寶七重—金銀瑠璃玻璃硨磲赤珠瑪瑙にて鏤めたる七重の箱
法性の理躰—不生不滅の眞理
三世—過去未來現在
十界—六道と聲聞緣覺菩薩佛
中道實相—何れにも偏せず遮實にして常住なる相

彼の國の大臣、大職冠鎌足が娘を呼びむかへ、后妃の位に立べき由、望みつがひしかば、鎌足悅び、「小國の臣下、大國の大王に婚禮せんこと、日本の面目なり。唐朝に傳はる花原磬、泗濱石。面向不背の玉、此三つの寶を、賴みの引出物にて和國に渡し、姫を迎へとるべし」との返牒なり。早く使者の器量を選んで、三つの寶を日本へ渡すべし」とぞ宣旨ある。少師房玄齡進み出、「さん候。彼の三つの御寶花原磬を打鳴し、九帖の袈裟を覆ふ迄、其聲更に止まず。泗濱石の硯には、水なくて墨の色、心のまゝに候事、いづれも度々御覽有。中にも面向不背の玉、七寶七重の箱の中、君を始拜したる者一人も候はず。抑此玉と申は、赤桐檀のみそぎにて、五寸の釋迦の尊像玉の中にましく、何方より拜しても、同じ面に向ふとは申傳へ候へ共、昔より誰有て、箱を開き拜したると申こと候はず。されば覺りの佛性を如意寶珠にたとへ、法性の理躰を指して玉と名付、面を向ふに背かずとは、善惡邪正森羅萬象、來れは映りされば去り、一善も貯へず一惡もとゞめず。月日の世界を照すが如く、一念の佛性三世十方に通達し、十界一心平等大會、有無の間の中道實相。上天の事は聲もなく臭もなし。有とも無しとも手をさらぬ、則天なり佛なり。此義を以て萬代不易の御寶と名付、御藏の中に壇を構へ、七重の箱に此

いはひこめ―齋
ひこめる
ふか〳〵―うか〳〵
奏聞―奏聞

心を、いはひこめられ候やらん。但誠の玉の有やらん、箱の中を存ぜず。ふか〳〵と日本へ渡し、若彼土にて開き見て、誠の玉のなき時は、唐土日本寶なきに極れり。但細工の上手を選んで作りたて、慥にして渡さるべうもや候」と道理正しく奏聞あれば、帝を始伺公の臣下、あつと感じておほします。中にも中書馬周、笏取直し、「小國とは申ながら、日本の王道補佐の臣たる大職冠、玉の道理を考へ知て、唐土の智慧を量らん爲の望と覺へ候。然るに今誠の玉は、有共無しとも云がたし、と披露せば、愚痴の衆生信心冷め、佛法を疑ひ罪障の種成べし。又世俗の迷ひを晴さんとて、細工人に勅諚有、玉を作つて渡されば、愚痴の衆生は信ずる共、智ある大職冠一人に嘲られんは、唐土の恥辱に候へば、能々御評議然るべし」とぞ奏せらる。帝實にもと思召、「所詮使の辯舌にこそ有べけれ。万戸將軍雲宗急ぎ召せ」との宣旨に任せ、衣冠あらため參内ある。其たけ八尺七寸、毘左右へ分れ、面色赫々たる骨柄は、四百余劫に竝びなく、粧ひ由々敷見へにける。帝遙に御覽有、「此度日本大職冠に、婚禮の聘物、花原磬、泗濱石、面向不背の玉、汝に持せ遣すべし。然るに此玉は佛法の深理にて、誠の玉の躰、有共なし共終に箱の中拜したる者なし　日本の萬民疑ひの心なく、佛法繁昌唐土の恥辱なき樣に、計ら

ふべし」と宣へば、万戸謹んで承り、「是は大事の御使、去ながら、臣つら〳〵考ふるに、小國の智恵何事か候べき。二つの寶に相添へ、面向不背の玉の箱をもつて彼の土に渡り、たとへ箱は開かず共、日本人に佛法の疑ひ晴させ、萬民彼の玉信仰の威力淺からざる樣に、何とぞ計ひ申べし。然らば道に達せし大職冠、唐土の智恵に歸伏し、姫を后に奉り、親子の結び末ながく、唐土日本隔てなく、御代萬歳の御使。はや御暇」とぞ奏しける。帝を始卿相雲客、大夫諸侯に至る迄、皆々「此義然るべし」と、花原磬、泗濱石、面向不背のしるしの箱、其外寶の數々に、翰林學士の書翰の草、御暇の天盃給びければ、万戸は時の面目にて、彼方の餞別此方の門出、上官中官下唐人、ちんぶんかんするちんたの酒盛、三國一の不二の山、見んとて勇む唐船、海路遙に三重出る日の、神の傳へし君が代や、唐使來朝の聞へかくれなく、日本の手柄國の晴と、兼て用意の都の町、思ひ〳〵に美を盡し、錦の幔幕玉簾、引續けたる金屏風、日影に照りて町小路、皆黄金の撒砂に、往來の人も身を飾る、女中の顔に映へば、軒の壁さへ白粉して、見物色を盡しけり。鎌足公の御娘、藤照姫は十八の、玉の肌を終にまだ、日本の殿にいらはせず、唐へ嫁入の惜きかな。和國の名殘今日は又、町屋の飾御覽とて、御供廻りかろ〴〵

親子の結―日本支那と親子の緣を結ぶ

翰林云々―翰林院學士の起草たる國書

ちんぶんかん―唐人の詞を嘲りて眞似たる詞、かんに酒の燗をかく即ち下人迄もちんたといふ酒を燗して別盃を酌むと也

供廻り―貴族の供人の一群

負が子が—子を負うてるが
通じ詞—通譯の次第

命命鳥—雪山に栖む一身二頭の鳥（三才圖會）
潯陽—浔陽
人魚—魚身人面者也（三才圖會）

と、態と忍びの町乘物、暫く立させおはします。辻に立たる商人の、背中にしやんと負が子が、編笠傾け聲張上、「唐人の行列唐人の行列、通じ詞の次第、進物土產寶物の次第具さに記し、上下は六錢一册で三錢、萬里の彼方迄つぶさに知れる唐人の行列」と、讀立てこそ賣にけれ。商「今度唐の帝より、大職冠鎌足公への御進上、花原磬、泗濱石、面向不背の玉、象一疋、虎豹二疋、花の咲根付の伽羅五本、實のなる枝珊瑚樹十本、小人島の夫婦丈は六寸、唐獅子の毛蒲團三十枚、赤柯檀の水風呂桶、命命鳥の雛、孔子の自筆の論語大學、一里四方の毛氈百枚、五色の氷砂糖千斤、麝香の猫、夢喰ひ獏、尋陽の江の生猩々二疋、但内一疋は下戸にて胡桃餅を餌がひとす。其外八疊敷の落鴈二箱、八尺廻りの金米糖一折、麒麟の粕漬、薄鹽の人魚、龍門の生鯉迄。日本の姫君の御出世祝ふ進物なり」と、讀たつれば、往來の貴賤珍しがり、皆々買ふてぞ通りける。供のこし本、「是なふお乘物よりお望。是へ〳〵と」呼ければ、商人腰を屈め、「ハアお乘物なは唐土の花嫁御、鎌足公の姫君樣と見參らせ、別に紙をも改し」と、懷中より一通を乘物に投入、世を忍ぶ身は編笠を、御免と計肩すほめ、打傾いてぞ居たりける。ヤヽ有て乘物より、姫「やいこし本共、是は唐人の行列ではない、あの人の訴狀そふな。字が

かたふて讀にくい。口上で聞たい」と、宣ふ聲に女房達「まア〳〵慮外なあの和郎は、お姫樣へ訴狀とは推參では有まいか。お願ひが有ならば、サア口で申しや」と叱らるゝ。面「ア、其樣にかど〳〵しうは云ぬ物。此ごとく背中に子を負ひ、其日過ぎの我等。人は情が第一。ア、去ながら、此躰に成しも余り情が過ての事、我らはもと御父鎌足公の執權、山上の次官有風が一子、若狹の介則風と申せしもの。先年御領分、播州高砂の明神、祉頭御建立の奉行に下り、逗留の氣晴し。同國室の戀里花月と申傾城を、只假初の酒の友、酒がこふじて、涙になり、涙がこふじて夫婦の約束。誠を盡す阿房を盡す、其かたまりが花月が腹の波間より、あらはれ出し此世悖。浮名はばつと高砂の、尾上の金も皆に成、まだ借錢に帆を上て、波のあはぢや見る影なき、貧に鳴尾の裏借屋、はやすきはひに唐人の、行列賣と罷なる。お主の不興親の勘氣、日本の地にて申譯は成がたし。あはれ、唐土のお供に召連られ下されば、一命かけて御奉公申、唐の天子の勅諚にて、主親の勘當御免を受たき御願ひ、姫君樣の御慈悲」と、涙にくれてぞ居たりける。お乘物より仰には、「聞けば不便や唐へ供に連るに付、直に密に問ふこと有。何處ぞ靜なる見世借て、幕の蔭に乘物寄せ、供の者は暫しが内、傍へ退け」と宣へば、應と答へて女房

こふじて—過ぎて
尾上の金—鐘にかけたり謠曲高砂に高砂の松の春風吹著れて尾上の鐘も響くなりとあり

十二一重―女官の礼装にて白小袖、單、五衣、表衣、唐衣、緋の袴等を著す

籠屋―牢屋

いくせ―幾何

達、門の小蔭に鏡屋の、見世先「御免」と舁寄て、六尺も皆横町の辻を廻れば乘物より、「なふ介様かいの」と轉び出、編笠押除け首筋に、抱付て「わつ」と泣、顔は花月姿は十二一重にて、勿躰ないと戀しいと、兎角思案に則風が、涙も夢の心地なり。芵「ヲヽ〳〵合點がいくまい。流浪の御身と聞より、此子が事の氣遣さ。足手限り命限りに、尋逢んと思ひ立、まんまと廓は走り出、須磨の關を通りしに、關破りの科人とて、縛つて都へ送られ、一年餘り籠屋の住ゐ。籠の中には樣々の科人、人の子を養ふて殺したと云者有につけ、もし金松では有まいか、とそれはいくせの案じごと。是母じやぞや。あれ見知てか笑ひが出る。いとしや乳が不自由なか、男鰥の介抱苦勞に有ふ」と、親と子に絶付て泣ければ、則風猶も不審晴ず、「籠舍に似合ぬ此ごとく供廻り美々敷、今日の見物どふぞ〳〵」といひければ、芵「ヲヽ是が猶辛い事。入鹿の大臣と云惡人謀反を起し、王位を亡さんとたくめ共、鎌足樣の御威勢強く、異國の大王を聟に取、唐と日本一味しては、をのれが本望遂られず。唐と日本の緣切ル爲、姫君樣を奪取らんと、さまざまの謀計。鎌足樣は御油斷ならず。幸みづから姫君樣に能ふ似て、とても仕置に遭ふ身なり、藤照姫と見せかけ、入鹿に奪ひとらせ、心をゆるす其隙に、安々と唐土の嫁入急がん智略

にて、斯樣に毎日出ること」と、語りもあへぬに則風「ムヽ入鹿めが數年の逆心知つたる事。斯樣の時こそ御奉公。入鹿が館に亂れ入、腕の骨太刀の金　續かん程」といふても、刃物は小刀も、さすがの則風腰撫廻し、齒嚙をしてぞ泣居たる。かゝる處に深山の樣成荒男、十人許むら〳〵と、「藤照姫はこりや爰に」と、花月が小腕引立る。則風「どつこひ合點」と、先に進む大男どうど蹴倒し、續て來るを取て投げ、起上るを組伏せ、摑合ふ其間に、殘る奴原花月を輿に打込で、飛ぶが如くに落失せけり。則「エヽをのれ等には構はぬ」と、左手右手へ撲伏せ、「やれこし本衆六尺衆、出合へ〳〵」と呼つても、怖れて寄付者もなし。たつた一人、追かけつ戻つつ泣つ駈廻り、踊ても跳ても詮方なければ、すご〳〵と賴みもきれし笠かたぶけ、「唐人の行列唐人の行列、三文と六文」と、一分五厘に見限りし、浮世のならひぞ　三皿定めなき。入鹿が猛威盛にて、諸卿も恐れしたがへば、帝震襟を惱まされ、御力には鎌足一人、氷に座せるごとくなる御位こそ危けれ。折しも殿上の小板敷どう〳〵と聞ゆれば、帝「すはや入鹿が足音、いか成非道かなすべき」と叡慮を苦しめおはします。抑蘇我の入鹿の大臣は、其母欲天の魔首修羅、胎内に宿ると夢見て　出生したる逆臣。父蝦夷の大臣驕慢の余り、勅諚もなき紫の冠

さすがも―戟刀ようしにて流石にいひかゝ

一分五厘云々―浮世は一分五厘といふ諺、世を輕く見る事

震襟―御心、宸襟

魔首修羅―大欲天の魔王にて奪命壞道法功德善本（智度論）

を讓り、上を輕んじ下を苦しめ、威勢四海にはびこつて、凡そ飛鳥も睨み落す勢ひ、諸卿も諂ひしたがひて、かの秦の趙高が、馬と欺く小鹿の入鹿に恐れぬ者はなし。鳳闕を も憚らず、のつさ〳〵と玉座にどうと居かゝり、入「是王殿、鎌足と心を合せ、彼が娘を唐の天子の后に立て、異國本朝一味して、此入鹿を亡さんとの御分別、入鹿が知らで有べきか。藤照姫は此方へ奪取、唐の緣も切レたれば、天が下に恐しい者なく、上見ぬ鷲とは某よ。サア鎌足が官位を褫ぎ、大職冠と云冠を脫せ、位田の所領を取上、無官の民となし給ふか。若左もなくば、御位安穩には置まじ」と、御衣の胸ぐら俯伏に取て伏せ、四方を睨む眼の光、御殿の壁に輝きて、只電ゝの如くなり。伺公の公卿内侍達、怖れわなゝき給ふ處へ、大職冠鎌足參内あり、大音聲にて、「エヽ淺ましき入鹿。此輩原國は忝も、天照太神瓊々杵の尊を天降し、此國の主とすゝめ給ひしより、神の御子孫相續いて三十七代、人間の胤ならず。月日の影にあたる者、畜類草木迄神と君との惠ならずや。況て大臣の位を給はり、國土の榮華を極る朝恩を忘れ、勿躰なや恐しや。此鎌足が首を取、身をづだ〳〵に刻んで、君をゆるめ奉れ」と、心を焦ち御身を揉み、落涙玉を亂しけり。入鹿から〳〵と笑ひ、「ヤアおろかなり鎌足。某が祖父馬子の大臣、

梃―夷蝦夷
紫の冠―大化に制定したる七色の冠の中の第三階の紫
趙高―鹿をさして馬とよばしめたる故事
位田―位により て朝臣に與へらるゝ田地を

崇神天皇—崇峻天皇の誤なる事論なし

崇神天皇を害せしが、見ンごと罰も當らず。父蛾夷の大臣、某迄日本に威を振ふ。國王の罰も人による。サア以前の御返事承らん」と、玉座を取て引下し、御胸にかつぱと乘かかる。帝は御歳十九歳、怖させ給ふ御氣色なく、帝「官祿を取上よとはをのれが事か。鎌足に何のあやまり有ル。忠臣の命に替るは天下に君たる道ぞかし。丸が位を下り居る共、たとへ命は取るゝ共、鎌足が身にかはらば露程も厭はじ」と、下をめぐみの御涙、御悼はしくも有難し。鎌足横手をうつて、「扨は我官祿を妬んで、君への恨みよな。ホ、ウ〳〵易い事〳〵。君はづかしめらるゝ時んば、臣死すといへり。君より賜はる官祿、君の爲にすてん事、いたむ所に候はず」と、みづから冠打落し、「サア今日より土民となつたる鎌足、雲井の名殘是迄」と、御階を下りて庭上の、土に手をつき膝をつき、頭を下し忠義の程、帝を始奉り、見る人涙を流しけり。入鹿歡然と打笑ひ、「ヲヽ出來した。約束なれば天王は助けん」と、取て引立、黑戸の御所に押籠め、其身は玉座に安座して、「如何に鎌足、六位七位八位を下れば、汝は人でも九位でもなし。禁中には穢らはし。あれ引出せ」と云處へ、鎌足の執權山上の次官有風、年積て六十一歳、本卦がへり未の白髭、白糸の腹卷草摺高く捲り上、大大刀横へ一文字に飛で入ル。鎌足押へて、「ヤレ老に惚れ

君辱めらるゝ云云—君憂臣勞、君辱臣死（國語）

黑戸の御所—萩の戸の北、烟にくすぼりたるより此名あり人でも九位でもない—諺、人でも何でもないの意、九位を杭にかけたり

紙の頭巾―神宿るとかく

たる有風、娘を奪はれ官祿を棄て、國民となつたるも玉躰安穩の忠節。威勢有入鹿公に對し此擬勢、天王の御命は如何せん。冠すてゝも恥ならず、忠臣の頭には紙の頭巾も玉の冠、不忠の臣の冠は、鎌足が履たる沓を戴かせたるも同前。罷歸れ」と宣へば、有「いや聊爾はいたさず、入鹿に一つの契約有」と、振切てつゝと出「なふ入鹿の大臣殿、只今勝負を決すべきが、天王の御運時至らず、向ふ風に帆を上るは愚蒙の勇者。追付追手の時を得て、四海を治る臣は舟。ばゝんの海賊乘ふせ、入鹿公の御首は此有風が討約束。御面躰見覺え申」と、鎧の引合より眼鏡を出し面に當て、ためつすがめつ打詠め、立はだかつたる其勢、入鹿少共驚かず、「いけ年寄の推參者、捻り殺すはやすけれ共、能ふ生て五年か十年、老耄と思ひ助け置く。長居せば睨殺す、はや歸れ」と喚く聲、牛の哮るにことならず。有「ヲヽ、睨みづくには有風も、眼力には負まじ」と、目鏡をとつてからりと投げ、四角にきれたる兩眼を、八角に見出し、向ふをくはつと睨つくる。折ふし南門の軒に止りし番の烏、念力の眼に氣を打れ、羽をたゝき身を縮め、かつぱと落てぞ死てげり。入「ヤアをのれは曲者、いで入鹿が威勢を見よ」と、明星の樣成眼を開き、きつと睨付ければ、南門の棟瓦作りすへたる赤銅の唐獅々、搖めき鎔け湯とな

臣は船―君者船也庶人者水也

（荀子）

ばくん―怪冠の旗に八蟠の印あり。しを明人しか呼ぶ、禁を破る海賊（俚言集覽）

いけ―罵る雜語

石を抱き云々―好んで禍を招く事。抱ー石而沈ー于河ー（韓詩外傳）

つて、軒に滴り流れしは、恐しかりける眼力なり。入鹿大床に跳出、「あれを見よ。石も金も草も木も、我にしたがふ天地の間、大内も殿上も、此兩足の下にあり」と、南殿の板敷を、どう〳〵〳〵と踏鳴せば、有風も突立て、「ヲヽ、天罰知らぬ邪の、力頼みは石を抱き、淵に入鹿が白骨は、此兩足の下にあり」と、長はしの渡殿を、ぐはた〳〵〳〵と踏鳴らす。入鹿が足音どう〳〵〳〵、ぐはた〳〵どう〳〵、どうと踏とめ踏かへり、白眼で別るゝ二人の眼、夕陽滿月東西の、峰に輝く電光、項羽が勇力八十梟、本朝異國の古へを、一度に見るが如く成、中に正敷大職冠、天津兒屋根の藤原や、藤のしなへゆう〳〵たる、神代も思ひはかられて、善惡鏡に照しけり。

第二

谷の水峰の薪の道ならで、浮世に迷ふ墨の袖、山上の次官有風が末子、在天法師は七歳より出家と成、多武の峰眞圓僧都に仕へしが、兄若狹の介則風が、父の不興を悲みて、師の御坊に暇乞、四國中國尋れ共、兄の行方あらざれば、老僧の御事も、床しき山の身は後住、多武の峰にぞ歸りける。師の御坊待受、「ヤア在天、汝をこそ待かねつれ。都には

淡海公―鎌足の二男不比等

君の召されし云云―當時即位式

入鹿が惡逆さかんにて、鎌足公は官祿ともに御辭退有、御一家殘らず都を去り、御身が父有風御供して、當山に忍びまします」と、宣ふ處へ、若君淡海公、藤照姫も立出給ひ、「なつかしの法師や。逆臣にさへられ、父を始我々も、冠をすてゝ山樵と成、口惜き躰を是見よや。父鎌足は河内の國平岡の宮、兒屋根の御神に一七日の御參籠、氏神の御惠み、賴む」と計宣ひて、翼しほるゝ友鶴の、雲井を慕ふ御有樣。在天法師も「あつ」と計、あきれて詞もなかりけり。父の有風奥より出、「ヤア坊主、汝は兒を尋に出しとな。傾城白拍子に身を持くづし、今度の御大事にはづれし奴、尋出して何にせん。同じ手間に、一事も君の御用に立詮義こそ肝要なれ。扨此比都の取沙汰には、唐土の万戸將軍、讚岐の國に著しか共、面向不背の寶の玉、龍宮へ奪はれしとの風聞、西國邊にて聞ざるか」と云ければ、奪されば〳〵、其時我等も四國に候ひしが、三日三夜海上波風荒く、風雨雷電只事ならず、と近所の浦々恐れしに、程なく唐船讚州志戸の浦に著、寶の玉を龍神に奪はれ、万戸は日本へも渡られず、唐土へも歸られず、今において彼の浦に逗留、と西國四國是沙汰」と、語りもあへぬに、有風大きに悅び、「扨は疑ひなき實說。入鹿を亡す時節到來。我鬢髭を墨に染め面を塗り、天子御即位の時、君の召されし禮服は唐の束帶、恐

に帝唐の束帶を召さる

ちくら―唐と日本の汐境をちくらが沖といふ

童甫の冠―支那にて儒者の被る冠

烏羽云々―判別のつかぬ故人は有風と見るものなし

れながら我是を著し、万戸將軍と僞り、汝には次將の裝束通事の判事にまなび、入鹿が館に案内し、近付て討てだて有。延引しては入鹿めが、若し万戸に通路して、異國に心を通はしては事むつかし」と人々に内談しめ、俄に出立裝束の、姿は唐人身は日本、是やちくらが沖津波、碎く心ぞ　三重逞しき。入鹿が方にも入「万戸將軍、龍神に寶珠を取られしこと、其かくれあらざれば、今は鎌足唐土の緣きれたり。願ふ處の幸。我唐土に因んで、日本の王位を傾けん」と、傳を尋ね使宜を求め、人橋かけて志戸の浦、毎日事をぞ窺ひける。かゝる處に有風は、「面を塗て唐紅、錦の袂　綾の沓、章甫の冠　石の帶、素より丈は六尺二寸、老木に積る鬢髭の、雪を染なす烏羽玉の、烏羽に書文字なれや。それとは人も水いらず、親子智略の贋唐人。在天は中官と笠に仕付の髭喰そらし、入鹿が車寄に案内し、「唐の天子の勅使万戸將軍雲宗、葦原國の大臣入鹿公に、申し陳る子細有、見參」とぞ云入る。入鹿が執權眞烏の石丸、羽黑の熊主、「すは唐土の因みぞ」と、家内の上下悅び勇み、上段に褥を構へ請ずれば、ちつ共臆せずゆう〳〵と、上座に著しうづ高さ。在天は次の座に、威儀を正して座したるは、さすが大國の臣下と見ゆる風儀なり。兩人頭を下げ、孰壘「只今の御光臨何の爲にか候。我々承つて主君へ披露いたさん」

うす〳〵云々―例の出鱈目の唐音以下同じ

頭が高い―書の字音をとりて高ずるの意に用ふ

と、慇懃に述ければ、在天少しなぶらんと、まが〳〵しき顔付にて、「はあゝ、うす〳〵、すあぜ、ひい、さすわもう。さきがちんぶり、かゝさくきんないろう。きんにやうにやうにやん」とぞ答へける。石丸熊主合點せず、唐人は學問强く、我々が分にては詞中々通ぜずと、其比日本の學者　高向の玄理を挨拶にて、「御口上承らん」と云ひければ、「はあゝ、君けんくるけん、くるめあめいたかりんかんきう、さいもうすがすんへいするたら、こんたかりんとんな。ありしてけんさんはいろ。きんにやうにやん」とぞ申ける。さすがの玄理一圓合點いかね共、知らずと云はゞ恥と思ひ、「あれ皆文字にあたりし事。今度入鹿公鎌足を追失ひ、追付帝位に立給はん御祝義なり」と、物知顔の推當。猶使はんと圍を以て玄理を招き、奪「てれめんていなばじりこん、さんとらにいにようゝ萬能膏」と、膏藥の名をいへば、玄「それ〳〵慮外な、頭が高いと御意なさるゝ」石と熊「あつ」と頭を下たりし、おかしくも又愚なり。兩人重て、「不學の我々唐韻通じがたし。日本詞御存じならば、和語の御口上承らん」と望ければ、奪「ヲヽ尤々。某此度渡海の處、面向不背の玉、龍宮へ取られしこと都迄も隱れなく、聞も及び給ふらん。殊に鎌足一家沒落、此分にてすごゝ〳〵と唐土へも歸られず。入鹿公の御情に、彼の玉恙なく日本の帝に納る由、

一筆を給はらば、それを證據に唐土に歸り、其よしみには、四百余劫、入鹿公の御下知にしたがひ申べし。此旨披露」と云ければ、兩人彌〳〵悅び、「龍神玉を奪ひしこと、都迄もかくれなし。さて其處は日本の地か唐土の地か」在天心さかしくて辯舌は達したり。少もためろふ氣色なく、「ヲヽさればこそ、唐と日本の汐境、ちくらが沖を通りし時、俄に一天かき曇り、震動雷電雨霰、渦く波の内よりも小島一ツ湧出、八大龍王阿修羅王、異類異形の眷屬、數萬騎に身を變じ、玉を奪て龍畜の、五衰三熱をまぬかれんと、火焰の惡風釼を降らし、大盤石を飛する事、雪を散すに異らず。万戸更に事ともせず、抑大國のならひにて、百人の大將を百戸と名付官人といひ、千人の大將を千戸と名付受領といひ、万人の大將を万戸と名付將軍と云。音に聞らん万戸將軍雲宗とは我なり、と出立其日の裝束は、金剛不壞の左右の小手、三摩耶戒の臑當、忍辱慈悲の綱ぬき、寶筐陀羅尼の大鎧、あのくたら三ゝ藐三ゝ菩提の五枚甲、大とうれんの降魔の利釼、麒麟葦毛といふ名馬、波に沈まぬ浮沓かけ、平地を行より猶易く、さら〳〵さつと乘伏せ切伏せ戰へば、さしもの龍神阿修羅王、かき消す樣に失てげり。それより波風靜なる、此日の本や葦原の、四國の地に聞へたる、讃劫志戸の浦舟の、美女と變じ戯ふれて、玉を奪ひ大蛇

阿修羅王―身長二萬八千里、九頭千眼、口中出火、有二九百九十九手八脚」（祖庭事苑）
五衰三熱―天上の五衰として汗出塵落く等五の衰憊あり。三熱は一日に逢ふ事目に逢ふ事
金剛不壞―堅くして壞れぬ
三摩耶戒―八方の人を讃度する本誓
綱ぬき―皮鎧

と成、飛で入たる青海の、底」意殘さぬ御物語。「ァヽいひなれぬ日本詞くたびれたり。こんへいあるへい花ぼうる、かすてらかるめら、やうかんかん」といひければ、愚の兩人誠と思ひ、「いで〳〵披露仕らん。暫く是に」と變して、打連奥に入にけり。仕濟したりと有風親子、眼と目を見合せ、奥を見入て待處に、入鹿の大臣金巾子の冠、菊塵の裝束、さながら天子のよそほひ、ゆう〳〵と動ぎ出「万戸將軍とはあれ成か」と、目をも放さずまもりつめ、對座にどつかと著座する。有風飛かょつて、入鹿が眞中指通さんとする處を、入「さしつたり」と引ぱづし、腕首に縋付を、向ふへかはと突倒す。在天透さず飛でかょれば、入鹿起直つて襟髮摑んで、「ゑいやつ」と、三間計あなた成柱にどうど打付られ、たどよふ隙に眞鳥の石丸、在天を取て押へ、既に繩をぞかけたりける。羽黑の熊主、有風に組付處を、一振ふつて打伏せ、胴骨踏へて突立間に、入鹿後よりむんずと抱き、「おりあへやつ」とぞ呼はれば、我も〳〵と郎等共、弓手馬手より馳集まるを、大手を伸しはらり〳〵と投たりしが、大力の入鹿にしたょかにしめつけられ、我子の繩目に氣も弱り、老木の松の雪折と、捻曲られてかひなくも、數多の郎等立替り、千筋の繩を投かけ〳〵、七重八重にぞ搦めける。奈ェ、口惜や腹立や」と、子は親の躰を見て地團

あのくたち云々―梵語にて無上正等正覺と譯すとんへい云々―皆菓子の名なるを支那語にもぢりたり　菊塵―物塵天子の袍の色黃に青みがかった橡色　金巾子の冠―冠の纓を巾子と共に金箔の紙に包む、帝王の冠(貞丈雜記)　さしつたり―オイ合點

奈落―地獄

喰ふた顔―欺かれたふり

太踏で齒噛をなす。親は我子の縛めを、見る目に無念の涙をうかめ、齒をきり〳〵と喰しばり、怒の氣ざし頭に上り、髪逆立て冠を拔き、針を植へたる如くなる。樊噲が鴻門の、怒れる形も今爰に、奈落へ通れと踏む足に、熊主が脊骨はつしと折れ、目の玉飛で死したりしは、凄じかりける次第なり。かゝる處に奥よりもあはたゞ敷「先日奪ひ取たる藤照嬢、何處ともなく落失せ候。追手をかけられ然るべし」と訴ふれば、入鹿につこと笑ひ、「ヲヽ構はぬこと、しやつは似せ者、鎌足が誠の娘ならぬとは疾くより知たれ共、彼等に心ゆるさせん爲、態と入鹿が喰ふた顔。先兩人を引すへよ」と、椽先にすつくと立、入「をのれは正しく日本人。何故誰に賴まれし。眞直に白狀せよ」と、大音上て睨つくる。在天繩取引立跳出て、云んとすれば父はつたと白眼で、直「アヽウおろかなり。我我は人間彼は畜類。人間と畜類と問答したる例なし。一言も返答すな」奪「實に尤」と頷きあひ、空嘯いてぞゐたりける。入鹿から〳〵と笑ひ、「ヲヽ畜類に搦めらるゝ人間、此入鹿が目には虫と見る。あれ石丸白狀させよ」直「承る」と偃月の鐺鞘外し、二人が目の先鼻の先、突付〳〵閃かしても、びく共せず、またゝきもせず睨付る。直「ヤアウ凄まじい性根な奴」と、有風が弓手の横腹、ぐつと貫く鎚先の、朱になつて馬手へ通れば、在

たぐり―流す

大内―禁中

天はつと目もくれて、伸上り身をもがく。父は猶も色かはらず、「物いふな物をいふな」とゐせ笑ふ。入「ヤアいはせずにをくべきか。それ片腕打落せ」百「畏つた」と鑓投捨、太刀引抜て有風が、右の腕をずつぱと切て切落す。在天悲しさたまられず、兩眼に涙をたぐり、奪「をのれ蹴殺してくれん」と、駈出るを引すへ、引すゆれば駈出る。父は是を尻目にかけ、「見苦しい騒ぐな〳〵。物をいはど我子でない」と、云處を石丸又飛かゝつて、左の腕はたと切て打落す。有「物をいふな物いふな」奪「いや〳〵何も申さぬ」と、いへ共さすが目前の、親の苦み見る心、前後を忘れ齒を喰しばり、涙は瀧の如くなり。入鹿大きに興をさまし、「扨々しぶとき奴ら。をのれ鎌足が家人、山上の次官有風とは知たれ共、をのれが口からいはせん爲よ。それ〳〵頬を洗ふて見よ」「承る」と下人共、大桶に灰水を入、長柄杓にて酌かけ〳〵、流るゝ水も薄紅葉、顔も緑の鬢髭も、あらはれ落て白妙に、白髪とこそ成にけれ。入「扨こそ〳〵。世悴と云も兄則風は勅當と聞、多武の峯の坊主めならん。頭を見よ」と、唐人笠引ちぎつて法師の形。有風諸腕落されながら、入鹿が側に突と寄り、有「いつぞや大内にて、汝が首を取べしとの契約覺えつらん。今生の運盡て、只今汝に討るゝ共、一念主君の御身に入、契約の首を取ん事、三年は過べから

ず。其しるしには最後迄、いふまじといふ詞は違へず。大丈夫の魂思ひ知れ」と、はつたと睨む眼の光、たゞ明鏡の如くなり。さすがの入鹿返答なく、石丸に目配せすれば心得て、太刀抜そばめ後に廻り、有風が首打落すと見へけるが、此首宙に飛上り、飛下つて石丸が、細首ふつつと喰切たり。入鹿恐るゝ氣色なく、「やあ誰か有。法師めが首を打て。打てやうて」と下知すれば、在合ふ侍抜つれて、前後左右に立かゝる。有風が首飛上り、眼をいからし齒を鳴し、我子をかこふてくる〳〵と、彼方へめぐり此方へ廻り、寄付ものゝ眞額頬骨嫌ひなく、さん〴〵に喰付嚙付追廻し、猶も入鹿を餘さじと、火焔を吹かけ三重追かくれば、唐戸遣戸をはた〳〵と、さしもの入鹿堪りかね、帳臺さして逃て入り、家内の上下門外に、むら〳〵わつと逃散て、寄付者こそなかりけれ。有風が首立歸り、我子の縛め高手の繩、ふつ〳〵と喰切て、膝の前にどうと落、我子の顏をつくづくと、無念といはぬ計にて、別れを惜む血の涙、睡るがごとく成にけり。法師は夢の心地にて、父が首に抱きつき、前後不覺に歎きしが、「思へば父は忠と義の、名を重んじて身は輕き、我墨染の衣手も、不忠の垢に汚さじ」と、首引包む五帖の袈裟、かた見の色や紅の、血を佛の法の袖、泣く〳〵山に立歸る。眉間尺が古へは首に留る念力の、

遣戸―引戸
さしもの―鎖すにかく
眉間尺―父の仇

楚王に報いん爲自頭を刎て客に渡す客之を王に奉る、王之を寶るに爛れず、客王の頭を切り自刎す、三の頭湯の中にて喰ひ合ふ（搜神記）

龍門に云々―寶主も一時災難に出逢ふ事

ひじきもの―海藻にて鼠尾の如く長さ二三寸

卞和―卞和楚山に璞を得て獻ぜしに王石なりとて其兩足を切る（韓非子）

ひなび樽―鄙びたる樽

仇を報じて其譽れ、名を三國に三つ巴、是は日本當代に、一つ巴の波の音、四海にかくれなかりけり。

第三

龍門に跳る魚も、時あれば漁人の手に落るとかや。御痛はしや鎌足公、入鹿が惡逆に惱まされ、官を去り祿を辭し、藤咲門や紫の、花摺衣引替て、八重の汐路の鹽衣、讚州志戸の浦住る。都よりの御供には、乙鶴といふ童只一人、磯山松の下庵に、海士のみるめのひじき物。賈誼が長沙に遷され、卞和が楚山に脚きられ、あればある世の玉の緒の、命かぎりに彼の寶、日本に輝し、唐土に緣を結び、逆臣入鹿を亡し、君を安んじ、民を恤みの謀ごと、明暮に御心を碎き給ふぞ賴もしき。入日の殘る西の海、東の山に有明の、月ほのぼのと暮も隈なき木蔭より、若き男の山枴、重箱ひなび樽の酒、一荷に擔ふて、「乙鶴殿〳〵」とぞ招きける。鎌足御覽じ、「あれは若狹の介則風にてはなきか。何とて汝を招くぞ」と宣へば、乙「されば主親の勘氣の身、大事の時の御用に立ず、せめて寸志の忠節とて、此比ひそかに我等を賴み、其名を匿し、折々破子小竹筒を參らせ、戸障子床の

影ながちの—内内物を貫ぐ事

敷物迄、兎や角まかなひ候」と、申上れば鎌足公、「なつかしや親が形見に早く見ん。勘當ゆるす、是へ〳〵」と御諚ある。則風夢共辨へず、「はあ」と計に枴投げ捨て、御膝元に頭を垂れ、泣くより外の事ぞなき。やゝ有て鎌足公、「遊女花月を藤照婉と名付、入鹿めを欺きしに、聞ば汝が子迄生せし妻なるとや。父有風は君の爲國土の爲、入鹿を討んとたばかり入、運盡て討れたり。勘當も親の慈悲、黄泉までも汝が事、さぞや不便や、最期の顏見る樣に思はるゝ。有風を失ひしは、鎌足が片腕を打落されし如くぞ」と、御落涙は限りなし。則風猶も涙に咽び、「恥しや親は忠義に命を捨る、子は好色に身をやつし、主君の御大事、親の最期も存ぜず。不忠不孝の後悔、今更歎くにかひもなし。一たび忠を勵し、草の蔭成父が恨みを散ぜんと存る旨候故、只今は當浦、和布刈の戸次と申海士人の家に入、聟と成、名も五郎介と改め、此比影ながらの御奉公、御前を憚り扣へしに、御勘氣御免の御詞、苦の下成父有風も、面を和げ申べし」と、又さめ〴〵とぞ泣居たる。鎌「ヲ、實にも汝が一歳余り、我をはごくむ心ざし、とくより斯は見たれ共、底意を見屆大事を語らん、と知らぬ由にて暮せしが、扨は此浦の蜑と夫婦に成しよな。幸かな其女龍宮に入、此度万戸が取れし面向不背の寶の玉、取返すべき事かなふべきや」と宣へば、

則「我等も其心にて緣を結び、樣子を窺ひ候へ共、何處に龍宮有べき共量られず。惣じて海士の潛きと申も、僅か十尋か廿尋、それより底には鰐、鮫、鯱などの惡魚すんで、人を捕るとて恐れをなす。殊に我等が女房、心狹き賤の女、夫を大事と存る故に嫉妬深く、萬疑ひ强き女、其上入鹿が方より、我君の緣迄も有かをせんさくいたす故、なまなか成事申出し、入鹿が方へ聞へんかと空しく暮し候。まして墓なき浦人の、波荒く汐疾ければ、過有とて海松も刈らぬ海士の業、そも神變はいさ知らず、取得ん事は中々に不定なり」とぞ申ける。鎌足重て、「いやく、成難しとて爲さずんば、何事か成就せん。殊に万戸が唐土へも歸らず、此浦に碇をおろし逗留す。日本の地にて失ひし玉、日本より取返さずば、且は唐土の嘲り、此界の寶を其儘にして捨置事、鎌足が云甲斐なさと、萬民に譏を受ば、入鹿が威勢彌增し、王位を傾け天下をしたがへん事遠かるまじ。かづきの海士を海に入、假令海底にて惡龍毒蛇の餌食となす共、二度玉を取返し、三國一の寶を日本に止めなば、貴賤萬民信仰して、心を研く眞如の玉、正直の誠を正し、皆忠孝の道を守らば、朝敵入鹿を討ん事、扇を以て燈を消すよりも易かるべし。去がなら、限りも知らぬ千尋の底、生て歸らん樣はなし。命は千金萬金より重し。何の恩にか海士

有か—所在

何の恩にか云々—何の恩ありて我爲に命を棄て

やと也

人の、我に命を捨つべきぞ。如何はせん」と宣ひて、思し煩ひ給ひける。則風聞もあへず、「玉取る事は不定成共、一命を奉るはいと易し。夫婦は一身、殊に胎内に我らが種を懐妊の身、重々譜代の主君、龍宮の道こそ存ぜず共、千尋萬尋はおろか、奈落々々金輪際迄分け入て、命を捨てよと申さんに、何か厭ひ候べき」と、申上れば鎌足公、「ヲヽ嬉しし本望たり。然らば日限を定め、万戸が船へも案内し、國中にも披露し、諸人の前にて、鎌足が玉を二たび取たり、と唐土迄も知らすべし。去ながら、汝が妻の命を取はかなさよ」と、宣へば則風も打萎れ、「我君の御勘氣は、御詞の御免蒙れ共、死したる父が勘當は、妻の命に我命、百千の命を報じても、許すと申詞は、今生にては聞れず」と、そゞろに浮ぶ涙の色、君も不便と思召、「汝が妻の海士人は、父が爲に嫁ぞかし。海士人を我子にして、天津兒屋根の苗裔藤原氏を授くべし。是こそ父も悅びの、露の恨みも殘るまじ。猶語るべきこと有」と、庵に伴ひ入給ふ。扨こそ後に房前の、余り恐れも有磯海、深きめぐみと三重夕しほの、和布刈の戸次は此浦の、蠣殼屋根も福々と、人の羨む老人は、一人娘の滿月が、養ふ手業海士の業、海に浸りてみるめ刈、螺鮑のかひがひ敷も、内で和布の干たばね、入聟の五郎介が、都男に揉るれば、鹽じむ肌につと

房前の余り―余りに房前浦の海士をかく、房前は滿月の子なるを淡海公の世嗣とせるなり

福々―茸くにかく　かひ〳〵しく―貝にかく　につとり―うるほひ粘る心に用ゐる（俚言集覽）　そこだめ―腹に仕込みたる子供　二人―五郎介と金松　生れぬ前云々―生れぬ先のむつき定めにかくなちず―破落漢　おかた―妻　云しちけ―云うて却て興をさます種になる　庚申甲子―庚申甲子の夜は男女の交接をつゝしむべしといふ俗傳あり、あたは不平の發語

りと、油に髪の赤ばりも、今は翡翠のくる〳〵島田。今玆三つの金松は、是聟殿の土産物、腹に八月のそこだめも、生れぬ前の睦しく、世帶持こそ奇特なれ。戸次は外より立歸り、「ヤア聟のならずはまだ留守か。いかな夜も〳〵日が暮ると出あるいて、浦中に不審うたるゝ。兄めは其方が子でもなし。腹の子を早ふ産め。二人共にくゝより付、大きな事の起らぬ先、まくし出して退ふ」と、頭を振て罵れば、遍「さればいの、側日にさへ余る物、女房の身に成て是が勘忍成物か。前のおかた金松が母近所にゐて、其處への日參、此推量は違ふまい。悠氣したらば厭れふかと、こらへてもこらへられず、いへばいふ程云じらけ。一期連添ふ大事の男、すひがらにせまいと本女房さへ懸引する。跡構はずにあた見られぬ、庚申甲子。一夜の間目も有事か、身が燃かへる」と泣わめく。戸次小聲に成、「こりや悦べ。今に腹立のやむこと有。今夜庄屋殿に浦中の寄合有、「入鹿の大臣樣より御觸にて、鎌足殿が四國の地におはするよし。緣の者でもあるならば、詮義して申あげよ、黄金十兩下されふとのお觸。是の聟の五郎介は上方者、あの夜歩きは曲者、穿鑿して注進せよ」と、庄屋中の内證。もしそれが定なれば、十兩と云金暖まる。うまい事で有まいか」と、かねと云字に目の光り、慾頬見れば滿月、ぞつと身顫ひ興さめて、

「なふ悋氣も男の大切さ、そんな事は聞もいや。上つ方の縁が何んの爰らへ入聟。假令それが定にても、夫や聟の命を賣て、儲けた金が身に付ふか。此金松は敏い子で、寢耳へでも入事は、五郎介殿へ筒抜。胴慾な事いはず共、納戸へ往てお寢れ」と、足にてそつと搖起せば、金松わつと眼を覺し、「乳のみたい」と泣出す。滿「ヲヽいとし。明日は磯端のせんまの嗅の乳囉ふて飲せふ」と共に寢轉び抱寄て、親の方へ手を振て、金「彼方へ〳〵」と目まぜする。戸次不興氣に顏ふくらし、「エヽすこびた餓鬼め待て居れ。父めと一所に入鹿樣へ引ずり、乳の替りに籠の飯喰はせふ」と、呟き納戸に入にけり。花月は不思議の難を遁れ、入鹿が館を忍び出、妻の行衞も知らざれば、先はお主の有家をと、尋ぬる姿しどけなき、志戸の浦曲の浪の音、松の嵐も聲すごく、一夜は爰の軒の下、膝に藻屑をかき集め、しく〳〵泣て宿りしが、芵「アヽ何の因果にか悅してもふ三年、今宵の乳のはることよ。絞り捨ふか。可愛や是は金松が呑む筈。此子は生たか死だか」と、思ひ沈みて泣居たり。芵「ハアウ此家も子持やら、乳呑たいとの稚聲」細目に開たる門口より、「アヽ御免なりませ。我らは旅の女、乳のはつた折しも、乳欲いとの痾むづかり。苦しからずば一口」と、愛想らしく云ければ、滿「なふ能ふこそほらしい。是は亭主の土産の

すこびた―俗にすこつぺ生意氣な事
聟―夫
しどけなき―だらしない
しほらしい―かはいらし

子、夜更て囉乳も仕憎いに、嬉しや〳〵。サア先爰へ腰懸て。扨も此子は喰分に仕合な」と、抱起せば抱取て、「余所の叔母がうま〳〵」生れ出たる懐中は、抱れ心の柔な、兩手を肌にひつたりと、乳房を含む口元も、目付鼻筋、芵「ヤア金松ではないかいの」金「なふ母様」と抱付ば、芵「ヲヽ母じや〳〵」と思はずも、傍へ遠慮も撫摩り、抱しめく、泣より外の事ぞなき。滿月宵より腹立矢先、親子を横に突倒し、滿「是介べい、和御寮は五郎介の馴染じやの。それ程心が殘らば、のきざりせず共なぜいたどいては居やらぬ。水子を我等が苦にして、囉乳して育てたも、五郎介殿を思ふ故。大事の男を夜隠にして、あげくに爰迄のさばり頻。エヽ憎や腹立や」と、泣わめけば、芵「いや是、尤これは我子なれ共、五郎介とやら四郎介とやらは何人やら知らぬぞや」滿「ヲヽ知るまい。わごりよの處にばッかり居て、内に尻が居はらぬとて蝶螺殼の五郎介と、土地で異名が付て有。毎晩毎晩蝶螺の壺燒、暖かな味い所を喰て仕廻、我には底に熬付た、苦い處を戴かせ、まだ其上に殼祇にうせたか。サア男連て來い。男返やせ」と身を燃す。芵「なふ我腹の立まゝに、去とてはわんざんな。誰が家共知らね共、折しも乳がはつた故、緣でがな此通。そなたの男の夜歩きの番はせぬ。阿房くさい事いやるな」滿「ヲヽ乳がはる筈。内の粟なら麥なら、

和御寮―汝
のきざり―退き去り歟、夫々抱て去りたるをいふなるべし
わんざん―無理非道
粟なら―粟でも

すかせ共―減ちせ共

祭ならでは使はぬ米迄もすかせ共、男の惡事を親に見せまい知らせまい、隱そふとする氣苦勞さ。女房が海につかつて憂目して、刈た海藻和布賣ても、錢一文内に置ず持運ぶ。鮑でも赤貝でも、中での見事な一番が、わごりよの口へ入るものが、乳がはらいでなんとせふ。乳計でも有まい、赤貝を喰やつたら、まだ何處ぞがはらふ。乳がはつて迷惑なら、ちぎつてやらふか」と、摑付ば突倒し、兩方擲いつたゝかれつ、金松は泣出す、更に分ちはなかりけり。かく共知らず則風は、我家に歸れば家の内、女の聲々、則「詞は、何事やらん」と覗けば、花月、今の女房、髪引合ふて泣伏したり。則「君御一生の御大事、命をもらふ女房。大願の邪魔、身の難義」と、心を碎く其間、舅の戸次わめき出、「一々殘らず聞てゐた。うぬら女夫談合で、入聟させて是の内を空にする。大强盜のいき掏摸め、どうでも鎌足の緣の奴に極つた。男めを詮義して、入鹿樣へ引ずり、盜まれた入替に御褒美に預る。あた喧しいうぬめら、つまみ出してくれん」と、親子を兩手に引摑み、外へかつぱと投出し、門の戸はたとさしければ、花月「わつ」と泣くゝも、子を抱上て、「なふなつかしの則風殿」と、絶付を突退け、和布刈刀すばと拔き、向ふ樣にはたと切、負たる我子は眞二つ、母は肩先切込まれ、うんと計に臥たるは、扨もあへなき最後なり。

則風血刀提げ、門の戸たゝいて、「女房滿月には今迄情の一禮詞には盡されず。恨み有は舅殿。身こそ賤しき海士成共、鎌足のゆかりならば、入鹿が方へ訴へ褒美を取らんなどとは賴もしい心入。推量の通某は、大職冠鎌足公の執權、山上の次官有風が嫡子、若狭之介則風と云者。あの女の色に迷ひ、君の御大事にもはづれ、父が入鹿に討れしをも知らず。不忠不孝の罪を悔い、子の有中をふり捨、此屋に緣を結び、君此浦にまします故、一年余りおことが取たる海藻和布を代なし、家内の物をかすめしは、身の榮耀にも欲にもあらず、皆主君のはごくみ。異國迄聞へし鎌足公、賤のはごくみ受給ふ、御運拙き御身の上、賤しき身にも心あらば、御悼しとは思はずや。然るに此度万戸將軍、龍神にとられし面向不背の寶の玉、此儘に置ん事、君御一生の御恥辱。海士を入奪ひ返さんと思せども、そこ共知らぬ龍宮世界、惡龍毒蛇の住家、生て歸らん樣はなし、と御心を痛め給ふ故、御心安かれ某が女房滿月が、命を奉らんとお受申て立歸り、今宵は我身の一生末來のこと迄染々と語り、夫婦の情におことが命囉はんと思ひしに、時こそあれ、昔の妻の入來り、嫉妬に胸を焦す折から、そもやそも夫の爲、死んでくれといはるべきか。かく成下つて我一生、忠孝は立られず、浮世は是迄。鬚は洗はずして其色白く、染ず

賴もしい心入―態と反對にいへり

おことと―滿月をさす

代なし―賣る事

さばくなーひろじなとも云、振舞ふなに同じ
恩の死は云々ー誘にて恩を報ずる爲には命を捨てねど憎の爲には死す

して烏は黑し。生れ付たる身の因果」と、いふも我身の憂涙、押へかねて見へけるが、則「是を見よ。只今則風が切ル腹は、女房へは恩送り、舅へは恨み晴し、一ッ腹を二ッに切。心を付て見物せよ」と、突通さんとする所を、戸次は駈出縋付、涙を流して、「エヽ聞へぬ〳〵曲がない。かゝる邊土の海邊に住賤しい我等風情とて、猿でもなし犬でもなし此爺も人間ぞや。始よりかふ〳〵となぜ打明しては給はらぬ。戸次が身代知ての通、見る影はなけれ共、褒美に惚て訴人せふと云心はさら〳〵ない。大事の娘が月花共樂む男のわき心、それが憎さの苦口。科ない二人迄むざ〳〵殺せと云はせず。可愛や宵迄小坊めが、爺樣〳〵といふた物」と、聲を上て泣けるが、「ヤレ滿月卑怯さばくな。恩の死はせね共、義理の死はすると云。武士の軍陣で死ぬるも、海士の海で死ぬるも、いはど同然。殊に天下の一大事、鎌足樣へ命を捧げ、死んでくれや」と計にて、「わつ」と泣ば滿月は、「能ふ思ひ切給ふ。女の身には主人にも、親にも神にも夫なり。龍宮は扨置、奈落の底に沈んでも、命は露塵惜からず」と、涙をかくす笑顏。則風は只伏沈み、「扨は命をくれんとや。則風が忠孝は、皆女房のお蔭ぞ」と、又咽返り歎きしが、則「思へば御身が胎内にも我子有、母が死すれば子も死する。妻二人子二人の命を取て、忠孝の道を立る

戒行―因縁といふに同じ

いさめ―なだめしづめる

妻―夫の事、以下同じ

淺ましさ。恩愛慈悲の道欠けて、心に任せぬ戒行や」と、顔を見てはわつと泣き、二人の死骸に取付てはわつとなき、狂氣の如く取亂せば、戸次は娘に縋つき、「おことが母も海士の業、鰐にとられて死したるが、鰐より猶龍宮の、遁れがたなき毒蛇の口。いとしや不便や可愛や」と、三人手に手を取組て、聲を揃へて歎きしは、目もあてられぬ次第なり。されば共海士人氣を取直し、滿「ア、おろかなり。龍宮世界もあればこそ、昔も入し例あり。とかく佛の御力。此人々の菩提の爲、玉を取得ん祈の爲」と、三人諸共手を合せ、南無や志戸寺の觀音薩埵の、力を合せてたび給へ」とて、大悲の利劍娑婆の緣、思ひ切たる海士人の、心の中こそ三皿あはれなれ。既に其日も極りて、唐船に案内有。万戸も船を浮ぶれば、志戸寺の諸僧樓船を飾り、龍神いさめの糸竹の調、近國の見物男女、陸には樓敷幕毛氈、沖に舟幕舟じるし、磯は吉野の花と成。海は錦の波潛る、立田川とぞ變じける。大職冠鎌足公、樓船に乘移り給へば、むざんやな海士人は、つまと父とが櫓櫂を取、腰に付たる千尋の繩、舟三艘に手繰積み、今こそ娑婆を出小舟、父も夫も涙の海、波に任せて搖れ行。海士人は妻の爲、思ひ切ても老たる親、夫の名殘是迄、と涙を袖の沖津波、舟ばりに立上り 五「若し此玉を取得たらば、此繩を動かすべし。其時人々力

を添へ、「引上給へ」と約束し、一つの利劍を拔持て、触蹴放し、波間にかつぱと飛入ば、唐船樂船見物船、陸の貴賤一同に、「はあ」と計に目を塞ぎ、積たる縄を繰入繰入、二三百丈くり入しが、不思議や縄先四方に亂れ、彼方へ引れ此方へ引、くるりくるりと引廻し、縄にたゞかれ散る浪は、一村雨の如くなり。鰊足御覽じ、「是は正しく海底にて、惡魚惡龍の追廻すと覺えたり。龍神いさめの管絃を奏し猶々縄をくりおろせ」と、いらつて下知をなし給へば、小山の如く手繰積たる縄を、くりさげくりおろし、樂は平調波返し、しんゐも澄て三重覺えける。數千疋の縄殘りなくくり入て、「今はいか成龍宮界、底津國へも屆かん」と、則風は縄先に目を離さず、今や動くか〳〵と見る處に、遙の沖に紅の、血汐の波渦き上り、玉は知らず海士人は、海上に浮み出たり。「すは龍宮より歸りしは。縄を手繰て引寄よ」と、大勢どつと集つて、「ゑいや〳〵」と手繰よせ、程なく舟に引上れば、惡龍毒魚のわざと見へて、五躰もつゞかず朱に成、髪は藻くずにからまれて、底の藻に住虫の息、今を最期と見へければ、「とても取得ぬ物故に、むざんの命捨しよ」と、船中「わつ」とぞ叫びける。鰊足御覽じ、「いや〳〵玉は取たるぞ。雜人共近く寄て罰うくるな」と、あたりの人を遙に退け、則風に抱起させ、いたはり給

しんゐ―心耳の訛なるべし

歸りしは―歸りしよ

五躰―頭と兩手兩足

へばやう〳〵と、肌少溫まり、息の下より苦しけに、「雲の波煙の波を分入、千尋計入けれ共、龍宮とやらんは思も寄らず。底には大蛇八尋の鰐、異類異形の惡魚多く、鯖をたゝき齒を鳴し、飛かゝり追廻し、身もづだ〳〵に成と思へば息絶へ、二度此界へは歸りしが、アヽ苦し、最早息も續かず。胎内の子も潮を呑み、共に苦しむ堪がたさ。親子の命も惜しからねど、龍宮へも至らず、御本意遂げざる口惜や。なふ我妻、今一度海へ入てたべ。幾度成共此からだの續く迄」と、起上らんともがきしを、鎌足をさへて、鎌暫く〳〵。命をくれよといひしは此事。たとへ龍宮に至らず共、玉を取たる道理なり。出其いはれ語て聞せん。耳にとどめて悟りを開き成佛せよ。抑面向不背の玉、唐の帝に有とはいへ共、箱を開いて慥に玉を拜したると云こと、何れの書にも見へわたらず。然れば、此玉は本佛の悟り、甚深祕密の一大事。非口所宣非心所測とて、口にも說かれず心にも測られず、鏡の内の影の如く、有ともなし共、手のさゝれぬ不思議不可得の、妙理をさして寶と名付し物ならんと、推量せしに違はず、唐土人の智惠深く、なしといへば僞り、有といへば覺束なく、折ふし海上の波風を幸として、玉を龍宮にとられしと、鎌足に謎をかけ、日本の智惠に打預けたる、万戸將軍が方便の僞り、感じて

出―どれ
帝―朝廷
非口所宣―口の述ぶる所に非ず心の測る所に非ず（法華經提婆品の句）

も猶余り有。其儘是を捨置ば、唐土日本寶なきに極つて、一切衆生信心怠り、佛力神力浅はかに、天下邪の道に入らん事を悲しみ、扨こそ斯は計ふたれ。汝只今龍宮へ入、二度玉を取返し、觀世おんの白毫に籠置たりと披露せば、萬民信心の誠に入、佛法末世に流布せん事、汝は正しく八歳の龍女、南方無垢の成道。胎内の子は左に宿つて男子なり。たとへ母は死しても、左鎌にて腹を割き、誕生すること我國の故實。養ひて我孫となし、此浦の名に寄せ、房前の大臣と名乗せん。於刹那頃發菩提心、變成男子」と合掌あり。鎌「サア只今が臨終」と、兩眼に御涙浮め給へば、則風も「國土の爲佛法の爲、死する命ぞ悦べ」と、おとなしくは云けれ共、馴れしふすまの妹脊の別れ、次第〳〵に身も冷て、我肌に覺ゆれば、共に消度憂涙、袖にも波を湛へけり。海士人微かに眼を開き、「扨は此御子を御養子の孫君、世繼の位になし給はんとや。ァ、有難や　忝や。かかる貴人の、賤しき海士の胎内に、宿り給ふも一世ならず。たとへば日月の行潦に、映りて光を増すとは妾が事、今生に思ひ置事なし。心殘るは我妻老たる親を頼むぞや。さらば」と計夕汐の、引とる息や波の泡、終にはかなく成にけり。其時鎌足公、古へ狐の奉り、御名にしおふ利劒の鎌、錦の袋より取出し、左鎌に押取直し、乳の下をかき切給

白毫―佛の眉間にあり光明を放つ圓形のもの
八歳龍女―法華經に八歳の龍女成佛したる事あり
南方無垢云々―龍女が北方陰の方より南方無垢の陽に赴き變生男子となりて成佛す(法華經)
於刹那頃―忽ち
行潦―雨降る時俄に地上に溜る水
狐の奉り―狐が鎌を奉りて鎌足の名とす

へば、誠に玉の男の子君、容顔氣高く出生ある。御裾の端を引斷り、若君押包み、船ばりに突立大音上、鏈面向不背の寶珠、龍宮世界三十丈の玉塔に籠めたりしを、海士人奪ひ乳の下をかき切り、玉を押籠め取歸り、主は空しく成たれ共、三國不雙の寶、日本に留り給ふ」と、呼はり給ふはあたりも響く計なり。万戸悅び、御舟にやがて乘移り、万「ア、善哉々々。日本の大臣の智力の程こそ目出たけれ。もと此寶はいつの御代より傳はる共、始もなく終もなく、まして七重の箱の中、終に拜せし者もなく、微妙無盡の深理なれば、有無の二つをはかりかね、龍宮へ取れしと申せしに、御身共道理を察し、海士を入て龍宮より取返したりとの悟の智惠、尊ぶにかぎりなし。いで〳〵しるしの御箱を渡し參らせん」と、七寶莊嚴の箱を取出す。萬里の海山隔たりし、異國の智惠、日本の悟、割符を合せし如くなり。鎌足しさつて三拜有、鏈「むかし文珠菩薩釋尊の御法を受、龍宮界に至り、龍女を始、無量不可思議の魚鱗を濟度し給へ共、靈山淨土は一足も去給はず、居ながら爰も龍宮の、深き悟りの心の玉。萬法一理に歸する時は、地獄極樂餓鬼畜生、人界の善惡不二、面を向ふにそむかず。万劫末代不易の寶、國土安全民安樂の、正眞の佛躰」と禮拜あれば、御箱より金色の光さし、十方遍照赫奕と、僧俗男女一同に、

文殊菩薩云々—法華經提婆達多品に出てたり

「あつ」と禮する其聲は、しばし鳴もしづまらず。此佛力に神力も、ます〳〵入鹿を亡さん、瑞相吉左右荒海の、底量りなき智恵の海、盡る事なき身の内の、寶の玉眞如の玉、花原磬、泗濱石、三つの寶に秋つ島、和國を祝ふ唐樂の、太鼓も鉦も千秋樂、吹や喇叭もちやるめらも、萬歳樂をぞ調べける。

ます〳〵―增すにかく

ちやるめら―喇叭の柄に笛の如き孔ある支那の樂器

第四

草木心なしといへ共、花に嘉瑞を顯はすためし。比は霜月廿日余り、名は春めきて春日の里、三笠山の松が枝には、一夜が中に藤の花咲亂れ、紫白色を爭ひ、彌生の空に異らず。是ぞ藤原氏榮ふべきしるしとて、多武の峰の眞園僧都、天津兒屋根の御神を假に勸請有ければ、貴賤上下の參詣に、引るゝ藤の花かづら、來る人群集をなすとかや。入鹿の大臣是を聞て大きに疑ひ、「老陰かへつて一陽の氣に催ほされ、寒天に諸木花咲こと有とはいへ共、三笠山に限り、しかも藤の花計、何條咲こと有べきか。誠や木の根に酒をそゝぎ　めぐりにて火を焚けば、時ならず花咲といふ。是は正しく藤原氏繁昌の印と諸人をなつけ、世になし者の鏃足を取立ん爲、眞園僧都が謀鏡にかけて覺えたり。我

勸請―神の靈を此地に移して祀る事

世になしもの―世に捨てられた鏃足

波羅密多―はちむにかく般若といはん爲に置きたり

鴆鳥―小さけれども大毒あり

直に見分し、神力に咲花なり共、睨み散して世の人の、馬鹿信心を散ぜん」と、官人少少相具して、神慮も疑ふ悪念を、心に深く波羅蜜多、般若坂にぞ著けける。霜枯れ残る草村より、鯉一疋駈出、入鹿が指貫の、括の裾に隠れし處に、又大き成猫一疋、續いて鯉を追かけ出、此處彼處と尋しが、尾先を見付飛かゝり、引咥へ喰ひつかんとせし處に、四方の笹原薄蔭、隠れし鯉五六疋、飛出々々猫を取巻き喰かゝる。猫も命の大事ぞと、鼻を吹牙を研ぎ、振放せば飛かゝり、上へなり下へなり、哮りうなつてはげみしが、終に猫を喰殺し、鯉は悦ぶ畜生殘害、散り〴〵にこそ逃失せけれ。入鹿眉を顰め、「ヤア彼を見よ。猫は鯉を取獣に極れ共、友を語らひ隠れ居て、不意に打て出たれば、猛き猫も弱き鯉に亡ぼさる。鴆鳥海に隠れて鯨を害すといへり。人間の身の上かくの如し。何とやらん胸騒し。今日の出行氣遣し〳〵。油斷は怪我の基、藤は咲共さかず共、詮義して無益の至り。必定鎌足がゆかり近邊に忍び居て、我を狙ふと云天の告と覺えたり。いかに坂熊兄弟、汝等密に人數を伏せ、多武の峰三笠山の邊順見し、鎌足がよしみの者、男女によらず召捕るべし」と、木蔭木の間に眼を配り、足早に立歸る。神佛おそれぬ心にも、猫と鯉に威されて、氣を失ひし野鼠の、穴に入鹿が身用心、あやうかりける三重浮

世かな。

藤照姫道行

巖の松の雪折れて、おのが枝さへ便りなき、それを力に這かゝる、身は危しや藤照姫。古郷は敵にせばめられ、父の行衛も覺束なく、乳母計を頼みにて、忍びて出る春日野や、若紫の摺衣、旅の袂に脱かへて、身はいつの間に賤の女と、奈良の都を立別れ、讃岐の浦へと玉鉾の、御有樣こそあはれなれ。かへり三笠の山かくす、あしたの雲の棚引て、春待敢ぬ鶯の、鳴音尊き法華經や、普門品の觀世音、二月堂よと伏拜み、猶行末は白雪の、山又山に降積り、妻戀かねてなく雉子の、涙やほろりほろゝ打ッ、野邊の景色は物寂し。飛火の野守出て見よ、今幾日して又こゝに、歸らん事も片糸の、糸よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳とつらねたる、ウタイ西の大寺是かとよ。日も夕暮の旅衣、一夜の宿を柏木の、森の下つゆ露もりの下、浮れ烏の告渡り、夜明の空もほのぐゝと、舞白きを見れば三芳野の、花を嵐にまづ見せて、雪をめぐらす車坂、豐浦の寺は露ふりて、月常住の御燈をかゝげ、霧不斷の香を焚き、ウタイ寒庭の松の風、讀誦の經に音信て、猶も

殿の松―此句曽我の縁語　忍びて出る云々―春日野の若紫の摺衣忍ぶの乱れ限り知られず（伊勢物語）　奈良―なるにかく　玉鉾の―道行の三笠山―見白雪―知らずに飛火云々―燈火の事古今集に春日野の飛火の野守出て見よ今いくかありて若菜つみてん　糸よりかけ―淺錄糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳かな（古今集）

日常住云々―壺破れて鼎不斷の香をたき扇もちて月常住の燈をかゝぐ（謠曲 大原御幸）

布留―振るにかく

殊勝ぞまさりける。尾上の鐘の聲近く、無常を知らする初瀬山、今宵は爰にこもりくの、

歌 籠る心は一筋に、佛の御名をくりかへす 乙女の袖や神樂の鈴、布留の御社あれかと

よ。いざ立寄て御室山、麓の尾花うら枯れて、霜に弱りし虫の聲、いとど哀をもよほせ

ば 涙を袖にせきかけて、紅葉しがらむ立田川、さながら山は、山はさながら唐錦、縫

ふてふ針に苧環の、此山もとの神垣や、三輪の明神ふし拜み、勇む心は生駒山、神は濁

らで住吉の、岸の姫松幾千歳、絕ゑぬ御法の天王寺、五重の塔の雲水に、月の光のかぐろ

ひて、暗きより暗きを照す金堂の、舍利の靈德明らけき、佛法護持の四天王、實に有難

き靈地かな。蘆屋の里の漁火も、晝は消へつゝ物思ふ。夢も難波の浦風に、霞晴れ行淡

路潟。藤「なふ〳〵これ左手を見よ。あの島の洲崎に波立て、あれ〳〵濱千鳥の、友呼ぶ

かぐろひ―隱るの延言

處に島陰よりも、漕出したる海士小舟、實に面白きながめかな。ア、傾ぶく月の西の宮、

和田の岬を打過て、雲に流るゝ布引の、瀧の白糸數散りて、袖に波越すあさぎぬの、浦

傳ひして行道の、やれ、彼の蘆邊に隱れ居る、田鶴のむら〳〵と立騷ぎ、磯邊の波

に羽をひたし、搖れもまれて又飛集る、打退き寄つ戯れ遊ぶ。イヤ其風情、筆にもいか

で盡すべき」須磨の浦曲の苫葺の、松の木柱竹の垣、夜寒の嵐堪へかねて、今宵一夜は

飾磨の徒路―飾磨の蘆渦にかくし

室君―室の辻君

暫し休らひ―姫は之にて四國に渡り後には關係なし

四所明神―春日社は天津兒屋根武甕槌齋主、姫太の四神を祭る

三笠山若草山、つゞら山―皆同じ山なり

放下―田樂に似て鳴鼓サヽラにて舞ふ

明石潟　都の空の戀しさに、一首は斯ふぞ聞へけれ。「物思ふ心のやみに迷ふ身は、あらしの浦もかひなかりけり」と、思ひをのぶる言の葉に、飾磨の徒路辿り來て、室の港に室君の、夜な〳〵かはる契りには、空だのめなる人を待、旅はそれよりはかなしや。寄邊定めぬ四國船　うはの空吹く風待て、しばし休らひ三重給ひけり。來て見よとてや三笠山、冬もなかばに咲藤の、松の氷柱は氷れども、花のしなへは春の色、四所明神の黑木の小祠、雪は白帛藤は幣、花見がてらの參詣は、袖を列て夥し。麓の道は商人の、三笠山とて飴賣や、若草山の煙草賣、つゞら山には辻放下、飛火の野邊の燒豆腐、餅賣酒賣簾茶屋、嗅が色有前垂に、爺が頭巾の隅に目を、付て悠氣も痴話の種、戀をふくみし腰付は、「是こそ味い看板の、根本仕出しの御奈良茶、是へ〳〵」と招きける。入鹿か郎等坂熊團中、同團下兄弟、拂手の人數をまばらに散し、群集の中に立交り、世上の噂人の振、心を付て廻りしが、「やい〳〵亭主、昔より宇治茶近江茶、又は唐茶甘茶などとはいへ共、奈良茶と云茶は飲ず。一ぷく飲ん」と床几に腰を懸ければ「ア、御尤〳〵。さればこそ外に類の無き故、根本仕出しの看板、奈良茶と申因緣お物語仕らん。總じて奈良の名物、先奈良油煙、奈良團扇、奈良草履、奈良素麵、下戸衆には奈良饅頭、上戸に

諸白―上等の酒

出來たーてかした

は奈良諸白、餘り過ては酒漬の、身は奈良漬と奈良柏、奈良刀の鈍燒な、破落漢は奈落の種、奈良茅績んだる子の親が、因果晒しに奈良晒し、奈良座の謠ひの口拍子、喰ならひ飲ならひ、好にならねばならぬ事。外にならびも奈良屋が奈良茶、下地は奈良の春日野の、雪の白づきすつくりと、鹿子斑に黑豆散し、さつとかけたる宇治の出花の、お茶がいやなら奈良計。されば古歌にも「奈良茶かや、此手盛りにて二タよそい、爺と嬶とが味を御覽ぜ」サア 嘘に一ぜんづつ上りませい」とぞ申ける。坂「ム、是は實に珍しからん。去ながら、腰かけて諸人に見せても喰れまい。なんと小蔭は有まいか」坂「いや其爲の幕の内、葭簀圍ひの御座敷、いざ御通り」と云ければ、坂「是は出來た。箸も茶碗も奇麗に、加減よふしてはや〳〵」と、幕の内にぞ入にける。跡見送つて兩人は、小わきに寄て小聲に成、奪「あれ〳〵きやつ等を御存ないか。入鹿が郎等坂熊兄弟、正しく御緣を狙ふ體。何とぞだまして討て捨たきもの」といへば、淡「是氏神の御惠み。何のだます迄もなし。おことも頭巾を取て捨、在天法師と名を顯はせ、我も此女出立をば脱捨て、鎌足が嫡子淡海公と名乘て打てかゝらん」と、宣ふ聲を聞咎め、幕より顏をぬつと出し、坂「ヤア〳〵鎌足が嫡子淡海公とは誰が事ぞ」在天はつゝ驚き、「ア、惡い聞樣。奇麗にせよ

釜—鎌足
杓子—樋子
厄介—淡海のもぢり

大食—大職冠
追焚—食無き又素足す事

白類—白類になるとものの略自慢の詞（俚言集覽）

とのお望み故、釜も杓子も淸めるが厄介なりと申た」と、間に合すれば打笑ひ、坂「ヲ、聞違へた尤々。隨分何も奇麗に」と、顏引入れば在天「扨もいかいたわけ者。去ながら仕損じては、大職冠の御爲如何」といふ聲に、又顏をぬつと出し「なんと〳〵、大職冠とは何事じや」在「ア、皆樣は耳は横についたか。大職冠とは申さぬ。御兩人ながら柄はよし、大食そふなと申事」坂「ハア又聞違へたゆるせ〳〵。目利は違はぬ一人前に五人當、追焚すな」とて入にけり。淡「たど取る樣成うつけ者、去ながら此方とても長袖。此上は運づく神力に任せん。いざ來い」と、主從勇んで神前に、暫く祈誓有處に、旅の老人在天が袖を扣へ、「今度此明神樣を勸請なされし、多武の峰の僧都樣お弟子の、在天御坊と申は御存じないか」と問ひければ、在「ム、在天とは我成が、親仁は誰ぞ」老「我等は讃劣志戸の浦、めかりの戸次と申者。鎌足樣より吉左右のお使」在「ヤア吉左右とは先目出たし。此女子と見ゆるは若君淡海公。御吉左右の次第、はや聞たし」と、時刻移れば以前の男、坂「こりや〳〵亭主、なんと奈良茶は喰はさぬか、但人をなぶるか。白癩聞ぬ」と腹立る。在「あい〳〵〳〵追付出來まする。それ曉椀拭け釜の下、爺は火を吹嵐吹く、霎まじりに身も口も、小聲に成て、在「今のはどふじや」戸「さればの事、我等が娘滿月

と申かづきの海士、則風殿と夫婦に成、此懐な子を設け、則此子を淡海様の、御養子世継になされん約束にて、娘の滿月命を捨龍宮に入、玉を二たび取返し、其悦びの御使」と、いひも果ぬに坂熊兄弟飛で出、二人の胸ぐらしつかと取、坂「サア曲者を捕へたり。出合へ〳〵」と呼はれば、散し置たる下人共、此處彼處より駈付て、一度にはらりと取廻す。坂熊團中大聲上、「最前より詞の端、心へがたく思ひしに、こゝな毛唐人めが娘の海士が命を捨、玉を二たび取返し、其悦びとは異國の万戸が、龍宮へとられし面向不背の玉よな。鎌足がゆかりに極つたり。有樣に吐出せ」と、取て伏せたる其勢、淡海公も浦人も、慄ひ恐れて返答なく、在天もとより氣轉利き、ちつ共臆せず、在「いやはや何れもの耳は何處に付た。龍宮ではない琉球と申た。玉と云は嘘が名、生國は薩摩の國、琉球問屋に玉と申て、年季奉公いたした時より、我等と夫婦の契約。所に彼の親方博奕うち。よみとかうとに屋財家財負ほうけ、あげくに年季の此玉を、たつた三百の抵當に張て、既にどうへ取るゝ處を、我等仕かけてわやをいひ、玉を二度取返したと云咄。聞外して胸ぐら取、むさい事めさるかな。ム、其方も博奕打チやら、斯ふ取た手付は骨牌握つた手付が有。竈相して後悔すな。手つけぶたじや」と云ければ、坂「ヤア當話の利たる

よみとかう―よみは骨牌よみに博奕、かうは女郎買なるべしどう―博奕の元方
わや―故障
むさい―きたない事なさるなぶた―札の連獨む手付札

奴めかな。誠それが定ならば、一々次第をとつくと語れ。サアぬかせ」と突放す。在「何が扨語て聞せん、よつく聞け。我は骨牌は知らね共、負て命を捨る共、女房故に捨ん命、露程も惜からず、と友達共を語らひ、三百の錢を腰に付、若し彼の玉を取得たらば、此錢を投出すべし。其時人々力を添へ、くすね給へと約束し、ウタ一枚ひねつて額にあて、彼のばくていに飛入れば、そろを脇から二くすじの三馬あざがけしのぎつょ、火をくわつくわつとかき立て、加番見れ共青もなく、上りも知らぬひらよみに、そも三枚はいさ知らず、取得ん事はけなしなり。斯てかうの場に至りて、座中を見れば錢高は、三百文のごくどうが、此玉を起して夜食をたかせ、つけめには八むく並居たり。其外中目、二目おり、遁れがたしや我命、さすが恩愛の手みその癖ぞ悲しき。あの親の札にこそ、二三四やあるらん、七二大名やおはすらん。去にても此まょに、打て果なん無念さよ、と涙ぐみて立しが、又思ひ切て手を合せ、南無や四と五に觀音釋迦樣、三枚坊主の苦悲を助けてたび給へとて、大悲の利劍を親に打て、うんすんを二目飛おれば、跡先しやんとぞをしたりける。其隙にお玉を盗み取て、逃んとすれば、各人追駈。かねて工みし事なれば、又ひらよみにまき直し、五したに打きり、つんばねあざばね、にぎりのそろでぞ勝たり

くすね―窃に盗みとる
一枚ひねつて云云―謠曲海士の大悲の利劍を額にあて龍宮の中に飛び入ればのもぢり
ばくてい、そろ三馬、あざがけ―以下博奕の符牒
ごくどう―人を罵る詞
うんすん―うんすん骨牌にて其打方は半目閑話卷八に詳なり

けり。負腹の習ひに勝逃忌ば、あたりに近づく下ぬきなし。約束の錢さし動かせば、てらをよみ立つながれたりけり。よの玉は知らず、此曇が玉の段」とぞ語りける。坂熊兄弟けら〳〵と冷笑ひ、「うぬらは人を痴氣にして吐したり〳〵。如何樣に珍んじても鎌足がゆかりに紛れなし。搦捕れ」と寄る處を、ひらりとしさつて淡海公、女の出立脱ぎ捨給へば、在天頭巾取て捨、用意の刀脇挾み、裾捻裏げ鉢卷しめ、床几の上に突立、「ヲヽ一段の推量。是こそ天津兒屋根の御末、大職冠鎌足公の御嫡子淡海公不比等、かく云坊主は山上が二男在天法師。寒天に藤の花咲こと、藤原氏の御運開くる神の告。此御祝ひにをのれ原をすかし寄せ、在天が手盛の奈良茶一杯づつ振廻んと待かけしに、能ふこそ〳〵。何も馳走はなけれ共、根本仕出しの一ぜん盛、代物僅か首一つ。サア來い」とするりと拔ば、淡海公も小太刀を拔き、數十人を左右に受、切立割立薙立、毬の岡へと三重追まくる。戸次は素よりかひ〴〵敷、小祠の扉押開き、僕の若君を社の内に隱し置、合口拔て打て出んとせし處へ、坂熊團下引返し、戸次が弱腰引摑み、「ゑいやつ」と取て投げ、社を開き若君を引出し、心元を一刀ぐつと指せば、不思議やな若君と見へつるは一連の藤葛、ゆう〳〵と延び出て、團下が五躰をくる〳〵と、纏ひ絡んでしめつく

珍んヒ―陳ヒ

合口―匕首

れば、只聲計うん〳〵と、立ずくみにぞ成にける。在天見付て取て返し、團下を押伏せ、切付んとはしたれ共、藤は春日の御神木、かれを切れば藤も切る、刃をあつるは恐れ有と、躊躇ふ間に兄の團中をつかけ來り、在天に討てかゝれば、松が枝の藤葛すつと延て、團中が細首に纏付、駈出れば引留め、飛かゝれば引留め、繋ける犬の如くにて、もがきあがくぞ心地よき。討漏されたる下人原、淡海公を追詰、既に危く見へけるが、枝々の藤葛一度にばら〳〵ばつと下つて、元首胴骨しめ寄せ〳〵引纏ひ、團中兄弟引寄せて、梢遙に引上る。足手ばかりは働きて、「エ、無念口惜腹立や」と、喚き叫ぶも寒風に、五躰とぢられ息斷れて、喉の潤ひ干蕪、釣上られてぞ死してけり。此因緣に末の世も、霜月春日の御祭、兎狸をかけまくも、忝し有難し、と社を開けば若君は、まめで小豆で若紫の、藤原氏の御世繼の、孫に奈良茶の煮花を、親仁も一ぱい旦那も一杯、我等も一杯、合せて神には三拜九拜。例幣奉幣たいてんなく、絶ず盡せぬ萬代の、松の齡を春日山、神の氏子の藤の門、開くる運こそ樂しけれ。

干蕪―喉ひからびて恰も干蕪を吊した樣なりかけまく―此祭日には兎狸もかけるとかけたりたいてん―退轉か

鴻臚館―京都七條にある外人を接待する所

智は萬代の寶とかや。大職冠鎌足公、明智を以て三國を察し、青海原の測りなき、寶を和國にとどめ給へば、世上の覺えゆゑ勲て、万戸將軍誘引にて、一度歸洛ましまし、鴻臚館に入給ひ、御一家諸共入鹿を討ん謀略。かれに親しき公卿を賴み、降參の和睦を請給ふ忠心こそは淺からね。倉田の參議高向の玄理、和睦の中立として入來る。淡海公二人に對面ましまし、「父鎌足精誠を盡し、寶珠を二たび取返せしも、全く身の譽れを殘し、此國にをいて入鹿公に對し、威を爭ふべき心いさゝかも候はず。佛在世の寶をながく日本に殘し、衆生利益の力によつて、後生菩提の便を求る計なり。殊に一年余り海邊にて心を盡し、鹽風におかされ、兩眼盲て盲目と成たれば、何面目に官祿に心殘すべき。藤照姫が婚禮に伴ひ、我ら諸共万戸將軍と打連れ、唐土に渡り、唐土人と罷成、二たび日本へは歸るまじ。是入鹿公に敵對致さぬしるし、御疑ひは殘るまじ。同じ日本の内にても、古鄕を慕ふ人心、萬里の雲水隔りて、二たび歸らぬ我々が臨終も同前なり。此世の名殘に今一度參内し、眼こそは見へず共龍顏を拜し、入鹿公へは降參の一禮申、和睦のしるし、万戸をも同道し、三ツの寶は申に及ず、廿余種の寶殘らず入鹿公に奉り、唐土の御暇乞申たし。御惠に預らば、鎌足親子が生前の悅び。兩人の御挨拶偏に賴み存る」

と、涙を浮め宣へば、二人「ム、餘義なき御心底聞屆候。以前山上の次官有風が慮外、又此比三笠山にて貴殿と在天法師が振廻、入鹿公御立腹甚しといへ共、降參の願ひとあれば各別。殊に日本を去て、唐土へ赴き給ふとの詞、御聞屆有そふな事、隨分取成申べし。去ながら、例へ唐土に至ても、入鹿公に對し、永く野心有まじきとの神文血判せらるべきか」と、云ければ、淡「それこそ望む處、仰は背き申まじ」二人「ヲヽ一段〳〵。其心底に極らば首尾調ひ申べし。密に參内の用意あれ。追付吉左右申さん」と、立出れば淡海公、「御芳志頼み存る」と、御手を下させ給へ共、終に雲井の松が枝の、梢にのぼる藤原の、榮行しるしと三重聞へけり。既に和睦の事とゝのひ、万戸將軍獻ずる處、廿余種の寶物、孫びさしに飾らせ、中にも生たる虎を鐵の檻に繫ぎ、南庭にすゑければ、嘯く聲の宮中に響き、龍の御馬、御車やどりの牛迄も、毛を立てこそ恐れけれ。かくて万戸は羽旄の旗鋒、八音の管絃を奏し、上判事都訓導、軍官寫字官馬才官、使令及唱小童子、列を正して參内し、大床に冠をかたむくる。遙の跡より鎌足公、淡海公に手を引れ、月日の影も水鳥の、陸に迷へる如くにて、御階近く成しかば、淡海公も手を放し、介錯申人もなく、紫宸殿の階段を撫探り足をうけ、漸々として堂上有。心を知らぬ卿相雲客、

神文―神明に對して誓を立つる書狀

孫びさし―母屋の庇に更につけたる庇

龍の御馬―寮の御馬か

八音―金、石、絲、竹、匏、土、革、木の八種の樂器

介錯―介抱

「さしも朝家の御堅め、ゆゝ敷忠臣成けるに、悼はしの有樣や、天下の鏡曇りし」と、忍び涙を流さるゝ。御簾近く膝行寄給へ共、途方を分ぬ風情にて、玉座の方を後になし、あらぬ方を拜し給へば、伺公の諸卿笑止がり、「ナフ玉座は背後、あとよ〳〵」と申さる。鎌足公驚き、居直つてさしうつぶき、涙をはら〳〵と流し、鎌「淺ましき身の果や。眼こそ見へず共、稚きより馴仕へし、殿上の方角忘るべき樣はなけれ共、此年月土民となり、海邊野山を家として、大内の方角も忘れはてたる情なさ。入鹿公はおはせぬか。降參申上からは、何の憎みの候ぞ。唐土へ渡れば二たび見へぬ鎌足なり。昔のよしみにめぐみ有詞もかけ、御殿の方角道引もして給はらば、かゝる恥辱も有まじき。貧家には古人疎しとは、今身の上に知られし」と、かき口說き〳〵、涙に沈む心中には、「和國の宗廟天照御神、住吉八幡、別して春日大明神、大小神祇哀愍加護の神力を加へ、今日入鹿を討せて給べ」と、一心に祈誓有心の内こそせつなけれ。時に御帳臺の御簾さら〳〵と揭げさせ、褥の上に入鹿の大臣、天玉に膝を竝べ、悠々と坐し居たり。御悼はしや天王は、鎌足を御覽じて、「方角は忘るゝ共、丸が聲はよも忘れじ。世の憂き中にも、范蠡有と賴みしに、兩眼盲て剩へ、唐土人にならんとや。世は是迄」と計にて、御涙にくれ

貧家には云々―貧人には舊知の人も疎遠にする諺

給へば、入鹿心地よげに打笑みて、「いかに鎌足、此入鹿に降參請ふて唐土へ渡らんとや、一段の思案。日本の地にて人の交りかなふまじ。はや〳〵暇とらするぞ。ヤァ万戸と云はあれ成か。さま〴〵のさゝげ物祝著せり。是へ來つて三拜せよ。盃くれん」と云ければ、万戸一言の返答なく、ずんと立て大床を、碎けよ割よと踏鳴し、入鹿が側につゝと寄れば、入鹿も褥を立上り、兩方柄に手を掛て、隙間を窺ふ其勢、獅子象のごとくにて、「すはや事こそ出來たれ」と、宮中騷ぎひしめきて、片唾を呑んでぞ扣へける。万戸御殿も響く大音上、「本朝はそは知らず、我唐土の道として、天に二つの日なしとて、二人の帝を一時に拜したる例なし。惣じて國王は國の魂。臣を手足にたとへ、君は腹心頭の如く、國に二人の王有は、人の身に頭二つ有五躰不具のかたわ者。万戸はゐこそ拜すまじ。疾う〳〵汝其座を下れ。異義に及ばゝ、異國の劒に日本の血を付ん」と、沓先ぐつと踏出し、はつたと睨む顏色は、さながら鍾馗大臣の、惡鬼を制する如くなり。入鹿から〳〵と笑ひ、「ヤァ事おかしし下唐人。扨は鎌足が眼つぶれ、をのれが力にかなはぬ故、此唐人めを賴んで降參と僞り、又某を亡ぼさん手だてよな。ムヽ面白し。日本には手に立者もなく、まだも唐土はかうばしく、入鹿が相手ほしかりしに、四百余劔に

鍾馗大臣―唐の玄宗夢に見し鬼傑にて鬼を退ぐ

名を得たる、万戸を只今蹴殺して、唐人の寐言いふ夢を、覺してくれんず」と、跳出て高欄の角柱、「忍いやつ」と引抜つゝ突立ば、万戸も飛下り、宣命の邊の大石かろがろと提げ歩み寄る。鎌足公は玉躰に引添ふて、心を配つておはします。入鹿すかさず飛かゝり、万戸が眉間を微塵になれと、打かくるを飛退り、八尺四面の切石を、礫にはたと打ければ、柱碎けて余る石、入鹿が仕丁五六人、ひし〳〵と打みしやがれ、同じ枕に死してけり。入鹿大きに怒をなし、「よしをのれ等は追而の事、先天王と盲目めを打殺さん」と駈上る。万戸入鹿が石の帶、平緒をかけてむんずと取、互ヤア口程もなし日本一の入鹿の大臣。唐土の万戸將軍ぞや。勝負もつけぬは本意なら ず。留まれ」とこそは引たりけれ。入鹿につこと笑ひ、「ヲヽをのれも助けぬ奴なれ共、某が身に腕をかけ、留れといふとて留るべきか。推參なり」と睨付る。其隙に淡海公、虎を繋ぎし鐵の、檻の錠前鎖を解て、「時分はよし」と呼り給へば、豫て相圖の官人共、管絃の吹物大皷鉦、一度に法螺を吹立れば、虎は哮つて跳出、殿上のはま床を飛上り飛下り、簾も几帳も踏破り、煙をたてゝ飛まはれば、堂上堂下上下の男女、皆ちり〳〵に三重迹失て、あたりに近付者もなし。異國人は心へて、大皷鉦をみの手に

石の帶—束帶の時に用ふる寶石にて飾る帶
平緒—束帶の時袍の上に著くる前垂
はまゆか—高さ一尺に三尺四方の臺にて四隅に柱を立てゝ帳を垂る
みの手—左右に張つたる形

立、虎を入鹿にけしかくる。入鹿も爰は大事ぞ、と太刀を抜て打かくれ共事共せず、或は欄干椽の柄、打折り引抜き投かけ〳〵防げ共、更に恐るゝ氣色なく、さすがの入鹿詮方盡き、冠も衣紋も打亂れ、逃つ追ふつ揉合しは、すさまじかりける三重はけみなり。終に萩の戸の片隅に追詰め、身を縮め脊を立て、喰ひ付んと狙ひ寄る。入鹿今は是迄と、「卑怯なり万戸。さすが三公の位に至りし某を、畜類の牙にかけ殺さんとは、奇怪なり無念なり。入鹿が最後の念力に、睨殺してのくべき」と、虎に向つて拳を握り、はつたと白眼む眼の光、さしもの猛虎毛を伏せて、じりゝ〳〵と尻込す。たるめばかゝりかゝれば白眼み、とどろ〳〵と小足をつかひ、面も振すまじろぎせず、哮りうなつて白眼合ふ、虎と入鹿が根くらべ。猛虎は白眼ふせられて、一文字に逃歸り、仁壽殿の軒近き、一村竹にぞかくれける。其時入鹿左足を踏み、「あれ見たるか万戸、汝等が鬼神と恐るゝ猛虎をも、一念の眼力に睨み伏せたる此入鹿。人力にて討ん事今生にてはかなふまじ。あつたら命を失ひ、日本の土とならんより、天王鏃足を捨置、本土に歸り、入鹿と云大勇の者有、と末代の物語にとどめよやつ」と呼れば、萬ヲ、潔し。去ながら眼力はまさる共、腕の力はかなふまじ。是を見よ」といひもあへず、虎の尾筒をしつかと

取り、引出して胴骨むずと抱き、一しめ「ゑい」としめ付、弱る處を下腮踏へ、上腮摺んで二ツにさつと引裂し、勇力膽を冷しけり。五「サア虎は異國に澤山。唐土の土産には、貴殿の首にしく物なし」と、いふより早く飛かゝり、入鹿をはたと蹴倒し、脊骨にどうど乘かゝり、五「朝敵入鹿の大臣を組留たり」と呼はる聲に、鎌足兩眼くわつと見開き、利釼の鎌を取直し、首ふつゝとかき切給へば、首雲中に舞上り、骸は太刀を引抜て、玉躰に討てかゝる。淡海公、鎌足公、「多年の本望此時」と、づだ〳〵に切伏せ、立上らんとし給ふ處に、俄に天地震動して、雷火亂るゝ雲間より、入鹿が首聲を出し、「我先生は天竺にて阿闍世王、唐土にては殷の紂王、今此土にては入鹿と生れ、佛法王法傾け、魔界に沈めんと誓ひしに、鎌足が天質の明德にをされ、外道破滅口惜し。せめて此面向不背の玉を取、衆生成佛の直道を塞がん」と、飛下つてしるしの箱を引喰へ、もとの雲井に上ると見へしが、王法鎮護の三笠山、春日の宮の方よりも、佛法守護の白羽の矢、雨の如くに降かゝり飛來り、入鹿が首に貫きて、朝敵亡び消失し、雪の春日の神風や、唐土さして嫁入舟、和國に寄する寶舟、帆は十分の秋津島、神と君が代治りて、五穀豊饒民安全、御藏にみつの御寶、蓬萊國とぞ祝ひける。

阿闍世―親を幽閉し釋迦に抗せし惡人

嫁入船―藤照姫唐山に嫁入する